Sogdian Textual Materials from Central Asia:
A Critical Re-edition of the Documents from Mount Mugh

Alisher Begmatov

中央アジア出土ソグド文字資料の研究
—ムグ山文書の再編集を中心に—

ベグマトフ・アリシェル

要約

0. はじめに

現在のウズベキスタン共和国･タジキスタン共和国にまたがるザラフシャン川流域およびその周辺一帯は，かつてソグディアナと呼ばれた地域であり，ソグド人の本土であった。ソグド人が使用した中世東イラン語であるソグド語は, シルクロードの国際言語として用いられたことがわかっており，中国やモンゴルを中心にソグド語資料が比較的多く見つかっている。ただしそれらの資料のほとんどは仏教、マニ教、キリスト教の経典などをサンスクリット、漢文、シリア語などからソグド語に訳したものである。一方，ソグディアナ地域で見つかっている数少ないソグド語資料の大多数をなすのは、ムグ山で発見されたソグド語文書であり、これらは世俗文書として他には見られない特徴をもっている。

ムグ文書について

8 世紀に中央アジアがアラブ勢力によって征服された際、ソグド王デヴァシュティーチは現タジキスタン北部に位置するムグ山に逃れ、そこで城砦を建てたとされる。その城砦跡と推定される遺跡からは 1930 年代に 80 点近くの文書が見つかっている。これらの文書は殆どがソグド語であるが、その他にアラビア語のものが 1 点、テュルク語（ルーン文字）のものが 1 点、漢文のものが 3 点確認されている。

これらのムグ山の文書は、Livshits (1962; 2008)と Bogolyubov&Smirnova (1963)によってすでに解読されているが、そのうち Bogolyubov&Smirnova (1963)が解読した主に経済関係の文書（A1-8 10,11,13,16,18; B1,2,4-13,15-20,27; V1-3,5,9,11,19; Nov.1,6）については見直しが必要である。また、他のソグド語資料には確認されない単語も少なからず含まれており、ソグド語の知識だけでは解読が難しいという問題がある。それらの単語を理解するためにはソグド語以外の中央アジアの諸言語（主にイランやテュルク系）を参照しなくてはならない。このような考えに基づき、近年コータンなどで発見されているソグド語およびバクトリア語など、他の東イラン諸語の経済文書などと比較することで、ムグ文書において従来不明であった単語を明らかにすることを試みた。現在までに数点の文書に関して先行研究における誤読があることを明確にし、それらをより正確に解読することを目指した。

1.1 書体と書記法

ソグド語の最大の問題は書体と書記法にあるといえる。アラム文字に由来するソグド文字は子音と長母音のみを記すため、読解に際して様々な困難を招く。また、それぞれの形がよく似ているため、区別しにくく正確に解読できない場合がある。各々の文書の諸特徴をつかみ、より正確な解読をすることが本章の目的である。

1.1.1 aleph, nun, zain, he, ain, tzaddi, resh

これらの文字は形がそれぞれよく類似している。本節でそれらの字体について扱う。

1.1.2 beth, yod, mem, kaph

beth, yod は形が合流してしまっているため、スペースがあるかどうかによってしか区別できない。また、文書によっては beth と kaph を区別しにくくなっている。また、yod と mem 区別しにくい場合がある。

1.1.3 gimel, kheth, schin, samekh, aleph-nun-zain の組み合わせ

これらの文字は先行研究で見分けがついていないように考えられる。本節ではそれぞれの文字について体系的な考察を行う。

1.1.4 vau, pe, tau

これらの文字は比較的区別しやすいものの、vau,と pe、そして vau,と tau が区別しにくい場合がある。

1.1.5 補助記号と句読法

ムグ文書のに補助記号が見られず、句読点は B-2 の文書にのみ観察される。

1.2. 言語の特徴

1.2.1 語順

ソグド語の語順は基本的に SOV 型であるが、ムグ文書、殊に経済・契約文書では頻繁に動詞が文頭に置かれる。

1.2.2 前置詞・後置詞

ソグド語は前置詞と後置詞の両方が存在する。前置詞は語源的に冠詞を含んでおり，前置詞と冠詞が同時に使われない。

1.2.3 前置詞・後置詞と代名詞の融合形

本節では、ムグ文書でみられる前置詞・後置詞と代名詞の融合形を提示する。

1.2.4 指示詞・冠詞

ソグド語の指示詞 「y-/m」（近称）、「š-/t」（中称）、「x-/w」（遠称）は古代イラン語の **ayam~iyam/ima-, *aiša-/ta,*hau/awa* に由来する。指示詞の主格とそれ以外の格では語幹が異なり、数と性の区別 がある。 ソグド語には二つのタイプの指示詞が知られており、一つは指示機能が弱化し、冠詞として機能するようになるタイプである。もう一つは弱化した指示詞を拡張して二次的に作られた指示詞である。冠詞は近称・中称・ 遠称の区別を保っている。遠称の冠詞は 3 人称代名詞としても機能する。

1.2.5　指示副詞

本節では、ムグ文書で観察される指示副詞を提示する。

1.2.6 関係代名詞

もっとも頻繁に観察される関係代名詞の内、ky と cw の用法の考察を行う。ky は ZY と共起しない場合は、先行詞を伴わないことがわかる。さらに、cw は代名詞以外に接続詞（Additive marker）として機能するが、ムグ文書のこれまでの編集版においては関係代名詞と解釈されがちな例が少なからず存在する。cw をより組織的に考察すると、接続詞の ZY が付属しない場合は、関係代名詞としての機能は存在していないか、または極めて低いことが分かる。従って、これまで cw を関係代名詞と翻訳された部分は、接続詞として新たに解釈することでき、文書の内容をより正確に翻訳することが可能となった。

1.2.7 名詞・形容詞

ソグド語の名詞や形容詞は文字の所為もあり、格変化が窺えしれないことが頻繁にある。

1.2.8 動詞体系

ソグド語の動詞は現在・過去語幹を有しており、それらの時制、ムードなどを考慮に入れて、それぞれの文書の理解を改善することを目指す。ムグ文書においては特に問題となるのは動詞の直示性であり、それに重点をおいて考察を進める。

1.2.8.1 指令法 (Injunctive)

Injunctive（指令法）の形が現在形と未完了形などと同じであるため区別し難いが、ムグ文書においては文脈から Injunctive と推定できる動詞が数点あり、それらを提示する。

1.2.8.2 謙譲語

先行研究ではソグド語の「命令する」という動詞には謙譲語としての機能は反映されておらず、その問題点を指摘する。

1.2.8.3 直示動詞

ソグド語には *βyr*、*’’s*「もらう、取る」、*δβr-*「あげる」、*’’βr*「持ってくる」という動詞の存在が知られている。ムグ文書、殊に経済関係の文書においては、これらの動詞は頻繁に使用されている。先行研究ではこれらの動詞の機能や用法について十分に解明されていない。これらの動詞と、ともに現れる冠詞、前・後置詞、副詞の間に一貫性（規則性）があることを提示する。特に、*’’s*「もらう、取る」という動詞はムグ文書では、移動を伴う動詞として機能していることを指摘する。

2. ムグ文書の文献学的研究

本章ではムグ文書を文献学的注と共に再編集を行う。文書に記録された品物名により、6 節に分けて編集を行う。最初の節では、まず織物、革製品に関係する品物を記録した文書を扱い、次に主に武器・装甲などが記された諸文書を扱う。2.2 節では、食・飲料に関わる文書を編集する。2.3 節では、執務官に送られた「穀物や他の品物の発給に関する」命令や依頼などの編集を行う。2.4 節では、様々な内容（経済と関わらない内容も含む）を持つ手紙などを編集し、さらに 2.5 節では、金銭などに関わる文書を扱う。最後に 2.6 節では、カレンダーに関わる文書を編集する。それぞれの概説を下記に提示する。

2.1 武器・鎧、織物や革製品など関係

ムグ文書の経済文書で扱われる品物の種類は、主に織物、革製品、武器・装甲、食・飲料（穀物、ワイン、家畜など）、宝石や金銭などに関わる内容である。特に、武器・装甲および織物と革製品に関わる品物名は、先行研究において正確に解釈されていない恐れがある。主に中央ユーラシアの諸言語に存在する関連する諸品物名と比較し、新たな解釈を試みる。さらに、ムグ文書の言語特徴を組織的に掴み、より正確に再編集を行うことを目指す。

織物や革製品、武器・装甲などに言及する文書は A-1, A-4, A-8, A-10, B-1, B-3, B-4, B-12, B-20, Nov. 1, C(=V)- 2, 3, 5, 6, 19 であり、本節においてこれらの文書を編集する。特に A-1, B-4、B-20 の文書は先行研究によって全体が誤って解読されている可能性を指摘し、独自の新解釈を与える。

A-1 とラベルの付された文書の新たな解釈を提示する。本文書中に登場する品物名は、先行研究ではすべて宝石類を意味すると解釈されてきた。しかし、現存するイラン諸語やテュルク諸語、そしてチベット語の織物に関係する単語と比較をしてみると、A-1 は宝石類ではなく、織物に関することを記した文書であると考えざるを得ない。また、B-4, B-20 の文書に記録された品物名も、先行研究では全て武器・甲冑などと解釈されているが、中央アジアの諸言語と比較した結果、

織物・革製品に関する単語であることを指摘する。B-4 では、これまで人名とされてきた単語は、サンダルを意味するインド系の言語からの借用である可能性がある。さらに、ヘルメットと解釈された単語はオセチア語の「ある種の革」を意味する単語と極似し、A-5 の文書でも靴という単語と並んで記録されるため、革と解釈するのが適切である。さらに、同文中に現れる「作られる」という動詞もこの推定を補強する。つまり、「革からサンダルが作られた」という意味であると考えられる。B-20 でも、先行研究が提案する装備などの品物名は見当たらず、全てが織物関係であることを新たに提案する。また、B-1 はこれまで訳されていない、或いは誤訳された単語を含んでおり、それらの訳を改善し再編集を行う。他の文書についても、これまで不明であった単語などを明らかにし、新たな編集を行う。ムグ文書で特に多く見られるものの一つは革製品であり、A-4, A-7, A-8, A-10, B-3, B-12, C-3, C-5, C-6, C-19,の文書は主に革について、B-3, B-12, Nov.1 は装備や武器類などが記された文書である。

2.2 食・飲料

ムグ文書には、食・飲料などの送付から消費量まで正確な記録がある。これらの記録には、ワインや様々な穀物が見られる。また、家畜類が記録される文書もある。本節では食・飲料の供給・消費に関する文書である B-9, B-14, B-23, B-10, B-5, B-2, B-8, C(=V)-11 を再編集し、さらに、これまで未解読であった B-23 の解読を試みる。また、容量の単位などもこの節に添える。

2.3 執務官（*Framāndār*）に送られた手紙

A-2, A-3, A-18, A-6, B-11, B-13, B-18, B-19 とラベルが付く文書はソグド王のデヴァシュティーチやアシュパーサックなどから執務官（*Framāndār*）に送られた「穀物や他の品物の発給に関する」命令や依頼などであり、これらをまとめて本節で編集を行う。

2.4 様々な内容を持つ手紙

本節では、様々な内容を持つ手紙などである A-7, B-6, B-7, B-16, B-17 を扱い、解釈の改善を試みる。特に B-7 に関しては、先行研究で誤った解釈がなされた可能性があり、新たな解釈を提案する。

2.5 金銭

金銭関係の文書は品物の価値についての情報が得られるため重要である。A-5, A-11, A-13, B-27, Nov.6、C-9 は金銭に関わる文書であり、本節ではこれらの文書を編集する。A-5 に関しては、数点の単語や品物名を新たに解釈し、内容を改善する。A-13 に関しては、先行研究とは多少異なった解釈を与え、その理由などを注で示す。

2.6 ソグドのカレンダー

ムグ山文書中には一点のみカレンダーが確認されているが、1930 年代に発表されて以来、改善されるべきところが多数ありながら、これまで再編集されてこなかった。本節ではカレンダーである A-12 と、日付が記された C(=V)-1 を扱う。

3. まとめ

ムグ山文書の内、数点の文書はこれまでに先行研究で解釈された内容とは一切異なることが指摘できたことは本稿の成果として取り上げられるが、それら以外の文書おいても部分的に新しい解釈を提案した。その過半数の場合、ソグド語と同系のイラン諸語やテュルク系諸言語でみられる単語などと比較することで得られたものであるが、ソグド語とは直接関係は持たないようなインド系の言語やチベット語などにもムグ山文書で見られる単語と共通点をもつと考えられる用語もわずかながらあった。このことは、商人としてユーラシア大陸の幅広い範囲で活躍した結果によるかもしれない。